宮崎県立日南振徳商業高等学校　　平成２２年７月６日（火）

校長室だより　１８号

中　島　　悟

【キャッチフレーズ】

未来に残そう　伝え築いた　振徳商業
目指せ　三種目　日本一　！

【７月月間目標】　『ごみの持ち帰りを徹底しよう！』

【今週の行事】７月５日（月）　全校集会（表彰及び全国大会・野球大会壮行式）
９日（金）　職員会議

【部活動紹介】

１	野　球　部	旧顧問	日高　寛	20周年記念誌より抜粋
２	野　球　部	投稿者不明		30周年記念誌より抜粋
３	出逢ったいい話	「兄からの手紙」		『致知』2009年10月号より抜粋

野　球　部（一部追加及び修正）　旧顧問　日　高　寛

日南高等学校の商業科から独立分離し、昭和４５年４月に日南振徳商業高校として創立した。野球部は、餅原和隆先生が学校創立の２年後に１年生１２～１３名の部員で創設された。毎日の練習はグランドがない為、グランド造りから始まり、石拾いの思い出などを当時の先輩、河野通伸さんは話されています。最初の試合は、１９７２年７月１７日、第５４回全国高校野球選手権大会、１年生の河野：由地君のバッテリーで、初戦は地元同志の対戦で、日南商業（現在の日南学園）に惜しくも３対２で敗れた。試合には、負けたものの、部員一同は野球の出来る喜びに湧いた。そして宮崎県高校野球史に、日南振徳商業高校野球部の歴史の１ページがしるされた。部員数も３１名を数えるクラブになり、練習場も完全に整備され、充分な活動が出来るようになってきた。過去２０年間、春、秋、県選手権等の諸大会で、準々決勝進出６回、準決勝２回と、好成績を残している。とくに、１９７５年、第５７回全国高校野球選手権大会においては、丸谷：大山君のバッテリーで準決勝戦まで進出した。惜しくも、宮崎商業高校に敗れ、甲子園の夢は、破れたが。その後、丸谷君は、プロ野球のドラフトで上位指名にかかった。プロ野球の世界には入らなかったが、新日鉄八幡で、現在も活躍中である。その年は、地元日南高校が優勝し、甲子園でも、強豪岡山東、興国高校、広島商業と対戦し、全国に日南旋風をまき起こした年である。餅原先生は、１０年前の野球史の本に、「設備や環境の整ってない時の部員のほうが素直で、何かやろうという意欲に富み、雑草のような精神力が、あったような気がする。好素質好環境の今の部員に、それがないのが残念である」としるされている。その後、川崎重雄先生が１年間、顧問となり、現在、日南高校から赴任してきた　私日高寛が指導しているところである。今ここに忘れてはならないことは、振徳野球を創設し指導して下さった、諸先生、生輩の方々への感謝の気持ちを持ち続けることである。それは、こ

れから後に続く、後輩達へも、同じことが言える。

そして、甘えるな、耐えよ、精進せよ、連日、同じような練習を重ねながら、それが度かさなる試合に、一度あるかないか。練習にあっては自分が一番下手な選手だと、努力し、試合においては一番上手な選手ということを意識し、自信をもって臨むことだと、部員たちに常々伝えている。本年は、１年生にも、有望新人を迎え、学校創立、２０周年、甲子園出場と心に残る野球を目指し目標達成の為、頑張っている。

野　球　部　（一部修正）

全国高校野球の象徴は３Ｆである。フェアプレーのＦ、ファイトのＦ、フレンドシップ（友情）のＦである。参加校は５千校に達しようとしてる。振徳商野球部の心得では、目的は、明るく思いやりのある、人に迷惑をかけない社会人になること。

目標は全国優勝である。その他に礼儀正しく、勉強との両立、全力疾走、大きな声を出す、グランド・用具を大切になどがある。学年を通して和気藹々。最近の試合五勝一敗。甲子園に向けてＧＯ！だ。

出逢ったいい話　「兄からの手紙」～ 私を導き、育んでくれたもの ～

一代で靴下業界大手・タビオを築いた越智直正氏の丁稚時代の思い出の記事より

１３年に及んだ丁稚奉公は過酷を極めましたが、古典とともに、あの厳しい体験がなければいまの私はないと断言できます。

６畳１間に６人で住まわされ、毎朝５時５５分の起床から深夜まで、休みもほとんどなく働きずくめに働きました。

大将には朝から晩まで「アホ」「ボケ」と罵られ、とことんしごかれました。何かへまをしでかそうものなら、「足を踏ん張れ。歯を食いしばれ」と命じられ、火花が散るほど強烈なビンタを見舞われました。まるで軍隊のようでした。

おまけに私は、四国出身で言葉も習慣も違うため、仲間からは格好のいじめの対象になりました。問題が起これば、何でも私に責任を押しつけてくる。１階で起きた失敗を、２階で作業をしている私のせいにされるようなひどい有り様で、１人で作業をする時には「わしは男だ、わしは男だ」と繰り返して、溢れてくる涙を必死で抑えようとしたものです。

一度その辛い思いを手紙にしたため、兄に送ったことがありました。自分はこの先も、器用に立ち回る都会の連中に交じってやっていける自信がありません。そういう趣旨のことを切々と綴ったところ、すぐに兄から返事が来ました。

封筒の中には２枚の便箋にたった２行、「山より大きな猪はいない　海より大きな鯨はいない」とありました。

きっと兄は間違って書き送ったに違いない。最初はそう思いました。しかし読み返すうちに、それが兄からの戒めであることが分かったのです。いくらガタガタと泣き言を書き連ねても実際はおまえが言うほどのことはない、黙って自分の職務を全うせよ、と兄は説いていたのです。